



第2章 まちづくり支援と自治体史の編纂

坂江, 渉 ; 木村, 修二 ; 兒玉, 州平 ; 板垣, 貴志 ; 前田, 結城 ; 水本, 有香 ; 村井, 良介 ; 市澤, 哲 ; 河野, 未央 ; 河島, 真 ; 井上, 舞 ; 大槻, …

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 12(平成25年度事業報告書):19-31

(Issue Date)

2014-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005557>



— 第2章 —

まちづくり支援と自治体史の編纂

播磨国風土記をめぐる兵庫県教育委員会文化財課との連携事業

風土記編纂の官令がだされて1300年たったことを期にして、平成25年(2013)1月、兵庫県教育委員会文化財課により「播磨国風土記調査検討委員会」が立ち上げられた。これは、兵庫県教委のほか、県内の旧播磨国に属する市町の文化財担当職員、および大学関係者等で成り立つ組織である。風土記の基礎的研究とその普及・活用をめざすことを目的としている。要請により坂江渉がその会長につき、そのほか地域連携センターからは古市晃、高橋明裕氏(立命館大学)が委員として参加している。昨年度はプレ企画事業として、風土記の地名比定地の仮現地調査と写真撮影等がおこなわれ、今年度から3ヶ年をかけて本格的な事業が始まった。

委員会では、坂江・古市・高橋の3名が基礎的調査研究グループをつくり、今年度は、風土記の賀古郡八十岩橋条、神前郡八千軍野条、賀毛郡修布里条などの比定地の現地フィールド調査をおこない、活用も含めた基礎的研究に着手した。また平成26年2月8日には、加西市の健康福祉会館で、風土記フォーラム「北播磨の風土記ものがたり」が開かれ、古市と高橋が報告をおこない、風土記研究の意義等をめぐる総合討論をおこなった(司会は坂江が担当)。大雪のなかでの開催にもかかわらず、180名以上の市民が参加し、播磨国風土記への関心の高さをうかがわす結果となった。

(文責・坂江渉)

包括協定にもとづく灘区との連携事業

(1) 本年度以前の活動関連

2005年度に制作した『篠原の昔と今』、および2006年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、本年度も少なくともはなつたが断続的に配布依頼があった。2014年1月時点での残部は『篠原の昔と今』は約300部だが、『水道筋周辺地域のむかし』が約25部となったため、急遽300部の増刷をおこなった。

(2) 本年度

本年度は灘区に関連しての活動はなされなかったが、別掲の本年度地域連携協議会において、「摩耶道のとおり村の歴史」編さん関連事業を中心とする活動報告を木村が行った。(文責・木村修二)

神戸市文書館との連携事業

2006年度より始まった神戸市文書館との地域史料の収集整理・公開・活用に関する共同事業を、今年度も継続して行った。文書館の開館日である月曜日から金曜日、午前9時から午後5時まで、森田竜雄・河島裕子・三角奈緒の3名が事業を担当した。事業内容としては、以下の通りである。

- ① 館蔵資料(古文書・複製資料)の台帳整備。文書群ごとに来歴、点数、所蔵形態(原文書、マイクロ、ネガ、コピー等)、目録の整備状況、配架場所などの情報を整理した。
- ② 『新修神戸市史』産業経済編の編纂への協力。
- ③ 市民へのレファレンス対応への協力。
- ④ 館蔵史料群を利用した企画展への協力。2013年3月9日(日)～22日(土)、「近代神戸の産業経済史」の展示のうち、パネル作成および配布資料作成を行った。今年度の企画展は『新修神戸市史』産業経済編の刊行を記念し、産業経済に特化して開催された。

地域連携センターのスタッフは、開港場としての都市神戸の発展、産業の発展と、そこで働く人々、人々

の胃袋を満たした農業・漁業の発展と、戦後の神戸ブランドの形成をパネル化を担当した。

神戸市文書館 企画展

近代神戸の 産業経済史

◆ 期間：平成26年3月9日(日)～22日(土) **入場無料**

◆ 展示時間：午前10時～午後4時 (会期中の、土・日・祝日は企画展の展示のみご覧いただけます。)

◆ 場所：神戸市文書館 (電話 078-232-3437 神戸市中央区熊内町1丁目8番21号 TEL: 078-232-3437 FAX: 078-232-3840)



神戸港の開港に始まる神戸経済の興隆と発展、人やモノ、各産業の動きをパネルで紹介いたします。港に関連した博覧会、神戸の「ハイカラ」の源流となる「みなとの祭」の華やかな情景など、当館が所蔵する記録写真や歴史資料なども同時に展示します。

主催：神戸市文書館 後援：NHK 神戸放送局
協力：神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター



また、一昨年度から、長らく閉館となっていた平日の午前中について、常時開館ではないが対応可能となっている。(文責・兒玉州平)

神戸を中心とする文献史料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

(1) 中央区：神戸北野美術館における展示協力

昨年度よりはじまった神戸北野美術館での展示は現在も継続している。

(2) 東灘区：本山ふれあい親父の会への協力

「まちづくり地域歴史遺産活用講座」に参加された清水光雄氏が参加されている「本山ふれあい親父の会」(会長前田邦夫氏)の活動への協力要請があり、6月27日木村が北畑会館(東灘区)を訪問し相談を受けたところ、同館に保存されている北畑区有文書の活用についてアドバイスを求めたい

とのことだった。木村からは、まず文書の整理や撮影などを行うべきことを説き、文書の保管方法についてのアドバイスをを行った。その上で、活用の一案として文書展示会を催すことを進め、公民館などの行う場合の簡易な展示方法などについて具体的に説明した。7月3日には文書の現状確認と番号を記した付箋の挿入作業などを親父の会の方々で行った。その後、11月23日と24日の両日、本山地域福祉センター(東灘区)において、親父の会の活動の一環で展示会が開催され、その一角に北畑区有文書が数点展示された。透明なテーブルクロスでテーブルの上においた文書を覆って保護する方法など木村よりアドバイスした方法が実践されていた。同会では北畑会館でも展示会を計画しているとのことである。

(3) 灘区：新在家ふれあいまちづくり協議会への協力

本山親父の会同様、「まちづくり地域歴史遺産活用講座」を契機に「新在家ふれあいまちづくり協議会」(委員長明石裕昌氏)より活動への協力要請があり、9月16日木村が新在家地域福祉センター(灘区)を訪問し、同会の会合に参加した。同会では地域の史料を活用した冊子づくりなどを計画されており、古文書の解読などを地域連携センターに協力を仰ぎたいとのことだった。新在家地区の場合は、区有文書のような核となる文書群が地元に残されていないため、限られた史料を利用するほかないが、神戸市文書館所蔵柴田家文書や、本学人文科学研究科古文書室所蔵の「御影村文書」中に、近世中期の新在家村明細帳写や新在家村絵図があるなど、活動の幅を広げる可能性はまだ残されている。次年度始めには、木村が新在家地区で史料紹介を行う小講演会が開催される予定である。

(4) 北区：有馬温泉・旅館奥の坊からの協力要請

昨年度調査を行った、同旅館所蔵の資料のうち、美術品についての報告書(橋本寛子氏執筆)を作成した。本稿執筆現在、同旅館は全面改装のため長期休館中で担当者と連絡が取れない状態のため、再開を待って送付する予定である。

(文責・木村修二)

財団法人住吉学園との連携事業

(1) 『住吉歴史資料館だより』の発行

『住吉歴史資料館だより』は、5月5日に第6号が、11月15日に第7号が発行された。

専門委員による執筆分についてのみ挙げると、第5号では、木村執筆の「『住吉村誌』を読む」江戸時代における住吉川の大洪水」が、第6号にも木村が「『住吉村誌』を読む」住吉村の聖地赤塚山」がそれぞれ掲載された。

(2) 「阪神淡路大震災と住吉」の開催

2013年11月30日(日)、住吉歴史資料館内の座敷において、住吉地区の各小中学校生徒を対象とした合同お茶会が開催されたが、これに併せて同館2階で、「遺跡からみる住吉の災害展」と題した展示会を開催した。

本展示会では、住吉地区内の古代遺跡の発掘現場に残る地震痕跡の写真などを展示した。

(3) 住吉歴史資料館展示関係

同館の常設展示について、昨年度以来断続的に展示替え作業を進めた。

(4) 阪神淡路大震災関係聞き取り調査

これまでに実施してきた聞き取りの録音データを文字データにおこす作業を行っている。将来的にはWEB公開やブックレット出版など何らかの方法で聞き取りデータの公表を行うことを計画している。(文責・木村修二)

淡河山田土地改良区との連携

淡河山田土地改良区は、120年以上にわたり、同地域の疎水・溜め池等の管理・運営を行ってきた。しかし、多くの設備の老朽化等もあって東播用水土地改良区と統合されることとなり、淡河山田土地改良区が持つ貴重な資料群が現用資料から外れることとなった。

そのため、現在、この資料群の整理・保存・活

用が目指されており、その方向性が探られており、地域連携センターからはスタッフが2013年11月29日(金)土地改良区の事務所を往訪し、資料の保存環境や早急な整理を必要とする資料群などについて助言を行った。同土地改良区との連携は来年度以降も継続して行われる予定である。

(文責・兒玉州平)

神戸元町商店街連合会との連携事業

神戸元町商店街連合会(みなと元町タウン協議会)との連携関係は、2009年12月の「西国街道モニュメント」の設置事業から始まった。これまで神戸経済同友会の「『神戸海港都市づくり研究会』(仮称)の設置による戦略的かつ継続的な都市づくりへの提言」(平成23年2月)作成に向けての文案作成支援、同会講演会の開催などに協力(2011年6月)している。今年度は昨年度に引き続きとくにめだった動きはなかった。(文責・坂江渉)

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定(包括協定)が結ばれ、それ以来、共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は、以下の通りである。

小野市立好古館：平成25年度特別展(地域展)「下東条地区西部のくらしと祭り」開催のための聞き取り調査

好古館の地域展については、平成22年度まで、小野市内の各地区の子供たちによる「調べ学習」を基軸にしたものであった。しかし23年度からやり方が変えられた。下東条地区地域づくり協議会では、地域の活性化をはかるため「下東条地区まちづくり活性化計画」を提言(4年間事業)。この中には豊かな自然と歴史をいかしたまちづくりの

提言も多く盛り込まれている。そこで地域づくり協議会、各自治会、学校が共同して、地域の歴史調査をおこない、将来的にその成果を「下東条文化財ウォーキングプラン」としてまとめることを決定。本年度の地域展づくりは、昨年度までと同様、こうした作業の一環に組み込まれ、その準備作業の成果の一端を公表する場に位置づけられた。

夏休み以降、今年度の展示会および「ウォーキングプラン」用のマップ作り等をめざして、基礎的な準備作業として、各地区（おおむね下東条地区に含まれる大字）ごとの歴史文化の聞き取り調査が実施された。

センターではこの聞き取り作業に協力（担当スタッフの坂江が参加）した。また昨年度までは歴史系の博物館実習生もこれに参加して、地域の人々と結びついた実習経験をしていた。しかし本年度は、好古館で実習する受講生がおらず実施できなかった。特別展の入場者数は、好古館での展示会が1692名（10/26～12/15）、コミセン下東条での展示会を含めて、総数1764名だった（昨年的好古館での展示会は1412名）。

なお協定の更新期にあたり、来年度以降、さらなる連携関係の強化をめざし、協議中である。

（文責・坂江渉）

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

（1）民間所在史料の調査・保全

① 枚田家文書

朝来市教育委員会からの依頼で、昨年度に引き続き整理作業を神戸大学で行った。今年度は、詳細な目録作成に取り組み、全点の目録化することができた。次年度には、目録集を刊行する予定である。

② 石川家文書

昨年に引き続いて、石川家が所蔵する古文書の整理を生野書院で行った。所蔵者が 移管してき

た古文書は、すべて中性紙の古文書箱に詰め、随時整理と写真撮影を行った。今年度も8月27日・28日に集中整理合宿として、未整理文書のクリーニングと附箋付けを行った。撮影データの整理を現在進めている。石川家文書に関しては、まだ多く未整理文書が残っており、次年度も引き続き整理・撮影作業を継続する予定である。

（2）生野町奥銀谷地域自治協議会での山田家文書整理活動への支援

今年度より、文化庁の支援を受けて（文化芸術振興費補助金・文化遺産を活かした地域活性化事業）、毎月1回のペースで生野町奥銀谷地域自治協議会にて行われた山田家文書の整理活動を支援した。今年度の整理活動成果として簡易展示「生野新町 山田家文書から見た近代の奥銀谷展」（会期：3月6日～23日、会場：かながせの郷）を作成し、3月16日には、講演会（板垣報告「日露戦争軍事郵便を読み解く」）を開催した。次年度も引き続き整理活動を支援する予定である。

（文責・板垣貴志）

丹波市における連携事業

（1）歴史講座・古文書相談の実施

昨年度に引き続き、「講座 丹波の歴史文化を探る——古文書との出会い」（以下、連続講座）を以下のスケジュールで開催した。

・7月28日 「地域歴史遺産の活用事例発表会」

前田結城（神戸大学）「丹波市における地域連携事業の目的と事例の紹介」／上田脩（春日町・棚原自治会）「棚原パワーアップ事業推進委員会活動の歩み」／井本健二郎（春日町・歌道谷自治会）「船城地区・歌道谷自治会の取り組み」／竹内脩（柏原歴史の会）「柏原歴史の会の取り組み」（柏原住民センター、参加者数33名）

・9月22日 前田結城「明治・大正期における村社会と自然」（春日住民センター、参加者数

19名)

- ・10月19日 村井良介「戦国時代の見方」／芦田岩男「丹波の戦国時代—赤井氏の動向を中心として—」(山南住民センター、参加者数33名)
- ・11月30日 木村修二「丹波の古文書から見た江戸時代—村人と山とのかかわり—」(青垣住民センター、参加者数23名)
- ・12月14日 井上舞「内尾神社の歴史と信仰—寺社縁起から見る丹波—」(氷上住民センター、参加者数22名)
- ・1月18日 加藤明恵「柏原藩政日記を読む」(ライフプアいちじま、参加者数34名)

本講座の参加者からは、毎回アンケートにおいて連携事業の継続を望む意見が寄せられている。また連続での聴講の事例も多数認められる。しかしながら、本年度は参加者数が例年に比べて低調であった。その最大の要因は、アンケート結果をみる限り、県民局主催の講座との日程の重複である。来年度は事前に厳密な調整をはかりたい。加えて、講座が講師から聴衆へ知識を伝達する場であったとしても、その仕方をさらに工夫する必要も本年度はとくに感じられた。7/28講座「地域歴史遺産の活用事例発表会」は、一方通行的な成果発表ではなく、「まちづくり」の具体例を市民の方々に知ってもらうための初めての試みであった。参加者からの感想は概ね芳しいものであったが、市の感想については聞くことができず、残念であった。

来年度は、調査速報的なものから、学術的に深みのあるものまで、あるいは古文書講座的なものから、親子講座的なものまで、幅を持たせたプログラムを編成し、単なる「入場者数」の増加ではなく、講座への「関与者数」(顔ぶれに幅をもたせる)の増加をめざしていきたい。

(2) 丹波市内古文書調査

<自治会文書>

- ・柏原町：柏原歴史民俗資料館所蔵上山家文書(12/26)
- ・春日町：棚原区有文書(6/19、8/11~12、11/8、12/25、2/10)

<旧寺社文書>

- ・山南町：高座神社文書(6/15、8/27~28、9/27~28、11/23)
- ・市島町：上田天満宮文書(9/28、2014/1/19)

本年度は、高座神社文書と上田天満宮文書の2文書群につき新規調査をおこなった。高座神社文書は県指定文化財高座神社本殿の修築作業中に発見されたもので、上田天満宮文書は、同天満宮氏子総代井上正直氏が上述の「地域歴史遺産の活用事例発表会」(2013年7月28日開催)にご参加いただいたさいに直接調査の依頼を受けたものである。また、継続調査中の棚原区有文書についても、本年度は「国領史」の分析が進行するなど、例年とはことなる展開があった。これらの調査成果および今後の課題として特記すべきことからは以下のとおりである。

(a) 高座神社文書については、全点の整理と仮目録作成を完了することができた。点数は全部で515点。やむなく一括で処理した束も多いので、実数は1000点を超えると思われる。本文書群で注目されることは、神社関連のみならず、近世・近代の谷川地区の自治・行政関連史料が多量に含まれていることである。宮司の田中氏からは学術利用の許可をいただいております。来年度はこれらを用いての速報報告会をおこないたいと考えている。また、2015年度には同社本殿修築作業が完了すると見込まれており、そのおりに、建築と文献で協力して修築完了記念のイベントができれば、同地域全体のまちおこしにも資することにもなりえるだろう。今後の検討課題とした。

(b) 上田天満宮文書については、近世後期朝廷(神祇官)と同社との交流がわかる史料が数点確認された。とりわけ、天明7(1787)年大嘗会への上田村からの「献穀」に関する諸史料(「神祇官和歌」など)は、近世後期の朝廷権威の上昇と地域社会がいかに関係するかを示唆するものであり、興味深い。これらについては、来年度6月に地元説明会を開催予定

である。

(c) 春日町棚原地区の調査について。本年度は旧春日町役場町長室所蔵「国領史」の内容を棚原自治会の方々と調査・分析した。「国領史」は明治後期に村誌編纂の機運が高まるなかでまとめられた簿冊とみられ、総ページ数は数百におよぶ。村の領域の変遷から、教育、宗教、軍事、農業など、当時の「行政村」のあり方を総体的にとらえることのできる格好の史料であることがわかった。同史料は6/19の調査時に全頁撮影をおこない、データは上田脩氏をつうじて棚原自治会へ贈呈済みである。

(3) 研究成果物の発表

① 『チョット好き国領ガイドマップ』の作成協力

発行日：2013年11月17日

発行者：国領地区元気な地域づくり委員会、
国領地区自治協議会

② 広報たんばへのコラム寄稿

昨年度に引き続き、市広報誌『広報たんば』に毎月古文書調査・研究結果を市民向けのコラムとして発表した。

③ 目録・史料翻刻

・目録

山南町高座神社文書目録(全515点)

・史料翻刻

柏原歴史民俗資料館所蔵「柏原藩政日記」天保14年分(400字詰原稿用紙約213枚)

同所蔵上山家文書「勅使西園寺様御巡行ニ付次第書」(400字詰原稿用紙約59枚)

山南町高座神社文書「六月十六日八日洪水ニ付所々破損覚書控」

(文責・前田結城)

(4) 丹波古文書倶楽部への協力

本年度も12回にわたり丹波市内の住民センターを会場に例会が開催され、木村がチューターを務めた。なお、8月10日の例会では、松下正和氏(近大姫路大)をゲストに招き、水損史料応急措置のワークショップを開催した。また、7月13日と1月11日の例会の後には、同市内においてフィールド

ワークが開催され、やはり木村がアドバイザーとして参加した。(文責・木村修二)

連携協定を結んだ加西市との連携事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5月16日に締結された。これにもとづき、本年度はつぎのような事業をおこなった。

(1) 青野原俘虜収容所関連資料の調査研究

第1次世界大戦中の独・墺捕虜が撮影したと思われる写真資料の調査研究は、これまで小野市好古館との事業の中ですすめられてきた。2012年度からは、加西市立図書館郷土資料係(担当・萩原康仁氏)との共同作業が始まり、今年度も写真候補地の現地比定や聞き取り調査を実施し、その成果を図書館ロビーにて展示する企画をもった。

(2) 加西市野上町の襖下張り文書の整理

2012年、加西市教育委員会の森幸三氏より連絡が入り、野上町内の旧寺の襖の下張り文書の剥離・整理作業についての協力要請があった。これを受けて、今年度から正式に「野上町歴史遺産調査事業」が事業化された。野上町文化財保存会のメンバーとともに、坂江・人見佐知子(甲南大学)・加藤明恵(大学院生)・板垣貴志(特命講師)らが、2枚の襖の下張り文書からでてきた歴史資料の目録取り作業、郷蔵に保管されてきた江戸時代の絵図の仮調査、旧寺所蔵文書の目録取り作業を実施した(8/7・8/21・9/11・9/30・2/24の合わせて5回)。その過程のなかで、旧寺で保管されてきた「幡



(明治7年開帳時の吹き流し)の型紙文書の解体・整理作業も実施した(三木市在住の尾立和則氏の指導)。3月21日には、旧寺の集会場にて合同調査成果の発表会をする予定である。

(3) 加西市の文化財審議協力

センター研究員の坂江渉が、2012年10月1日付で「加西市文化財審議委員」に任じられ、加西市の文化財行政の審議に協力した。

(4) 播磨国風土記の地名比定地の共同調査

兵庫県の播磨国風土記調査検討委員会の調査活動の一環として、加西市立図書館の郷土資料系の萩原康仁氏らとともに、播磨国風土記の賀毛郡修布里条の地名起源説話に出てくる「修布の井戸」をめぐる聞き取り調査、比定地の吸谷町と福崎町八千種の余田地区とを結ぶ峠道、通称「弥勒坂」の踏査調査などを実施した(2月7日、3月10日)。

(文責・坂江渉)

伊丹市における連携事業

伊丹市との連携は、東北大学災害科学国際研究所特定プロジェクト研究「東日本大震災の震災資料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討——宮城県岩沼市をフィールドとして」(研究代表者・奥村弘、平成24～25年度)を通じて行われた。

同プロジェクトの概要は、東日本大震災の被災地では、震災に関する写真や映像などのデジタルデータ収集とそのデジタルアーカイブの構築が国内外において進められている一方、避難所日誌・ミニコミ誌・ビラ・チラシ等といった震災資料(原資料)の収集・保存は、自治体レベル・各種図書館で行われているが、十分対応できているとは言えない。そこで、阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、東日本大震災被災地における民間を含めた震災資料の所在調査・収集・保存の方法論の構築に向けて、宮城県岩沼市を中心にパイロット事業を行うものである。

同プロジェクトの研究目的として、主に以下の3点が挙げられる。

- ① 研究会を実施し、阪神・淡路大震災以降の経験と研究成果を東日本大震災被災地の大学・自治体関係者などと共有する。
- ② 宮城県岩沼市において震災資料の所在調査のパイロット事業を行い、震災資料の収集・保存に関する具体的なイメージを共有するとともに、実際に震災資料の保全を図る。
- ③ 東日本大震災では大規模な後方支援が展開された。本研究では、被災地における震災資料の収集・保存のみでなく、後方支援地における震災対応記録の保存及び災害対応の記録化を図る。具体的には岩沼市に支援を行った行政の派遣職員等に対する聞き取り調査などを実施し、今後の広域的な支援体制構築に資する災害資料学の基礎的研究を行う。

伊丹市は発災直後から関西広域連合の枠組みの中で被災地、特に宮城県を中心に支援活動を展開し、2011年3月14日付で「東日本大震災伊丹市災害対策支援本部」を設置した。同市は災害時の応援協定を締結している宮城県岩沼市からの長期にわたる職員派遣要請を受け、これに応じ、職員の派遣を継続してきたことから、上記の研究目的③に含まれる。

さらに、岩沼市の避難所運営支援を行った愛媛県職員を対象とした聞き取りから、伊丹市の千僧駐屯地に司令部を置く陸上自衛隊第三師団が岩沼市内の避難所(岩沼市民会館)に給食支援を実施したことが分かり、来年度以降も伊丹市と連携した継続的な研究・調査が必要と思われる。

(文責・水本有香)

尼崎市における連携事業

(1) 宝珠院文書の研究

これまで、京都大学総合博物館所蔵「宝珠院文書」についての研究会をおこなってきたが、その

成果の一部が、『地域史研究』113号(尼崎市立地域研究史料館、2013年11月発行)に小特集「宝珠院文書から見る中世後期の尼崎」として掲載された。内容については次のとおり。

市沢哲「小特集にあたって」

古野貢「細川氏内衆の存在形態」

天野忠幸「三好氏と長洲荘」

村井良介「戦国期の長洲荘支配における下代益富氏」

伊藤啓介「舟屋法眼元恵と法華堂・長洲荘」

大村拓生「戦国期に奈良から尼崎を旅した僧侶たちの記録」

小橋勇介「貞治四年「野地前田田数目録」に見える人名と寺院について」

(文責・村井良介)

(2) 『新尼崎市史』編纂への協力

先頃刊行された通史編『図説尼崎の歴史』と対になり、市民が地域の歴史を調べる手引きとなる自治体史、という新しいコンセプトで発刊される予定の『新尼崎の歴史』の内容検討に協力した。本年度は、各時代ごとに具体的な章割り、執筆者の選定作業を行った。(文責・市澤哲)

フィールドワークとして、『観聞記』の記事にも登場した姫路・射楯兵主神社の三ツ山大祭の見学会を実施した。(文責・河野未央)

(2) 「読める! 古文書講座」の開催協力

2011年5月29日の台風2号の被害をうけた指定文化財「八瀬家住宅」の2枚の襖の下張り文書の分析と展示・活用をめぐり、新事業が2011年度から始まっている。昨年度からは「市民と大学が創る歴史ひも解き事業」が定期的開催され、近大姫路大学とも連携しつつ、これを支援した。この企画の趣旨は、「市民と大学が協働して、地域の歴史資料の発見、調査、解説、保存活用、成果発表などに取り組む。歴史と文化に親しみながら文化財保存活用の担い手となっていただき、新市修史編纂の礎を創る」である。

古文書講座は、今年度、たつの市内で合わせて6回開かれ、2/23には担当スタッフの坂江が「古代文書としての播磨国風土記」と題する市民向け講演会をおこなった。来年度は、これらの成果にもとづき、市民と大学と行政が共同して作る「冊子」等が刊行され、事業そのものを締めくくる予定となっている。

(文責・坂江渉)

たつの市との連携事業

たつの市との間では、旧新宮町の『播磨新宮町史』の編纂事業以来、密接な連携関係を保っている。本年度の活動は、以下の通りであった。

(1) 神戸大学近世地域史研究会

本年度も引き続き、近世地域史研究会を開催し、龍野城下(現兵庫県たつの市龍野町)町人林田屋平兵衛の記した『観聞記』の翻刻作業を実施した。昨年度発刊した『「観聞記」の世界(一)——播磨国からみる江戸時代』が新聞紙面で取り上げられたことなども影響し、新たに会に参加して下さる方も出てきた。今年度はまた、翻刻冊子の2冊めの刊行、会の運営方法等について議論を重ねた。また、同研究会の参加者の発案・企画により、

三田市との連携事業

「自治体史フォーラム in さんだ」の共催

2014年3月15日(土)午前11時から午後4時30分まで、三田市と神戸大学大学院人文学研究科の共催で「自治体史フォーラム in さんだ」を開催する(本稿執筆時点で未開催)。この催しは、①自治体史編さんの意義について自治体、研究者、利用者の立場から実務的・体験的に課題を提示する、②自治体史に対する期待や希望について、会場参加者を交えながら意見交換をおこない、今後の編さんのあり方に対する展望を見出す、③各地で編さんされた自治体史や地域史に関わる書籍・資料の展示、頒布の場を設け、地域史研究に関する情報交

換の場とする、を趣旨とするもので、内容は書籍展示(自治体史と地域史料の見本市)、基調報告、パネルディスカッションの3部から成る。

大学・研究者の立場、自治体史担当者の立場、及び利用者(ジャーナリストを含む)が直接対面して議論を行う新しい試みである。成果については、来年度の報告書で述べたい。(文責・河島真)

三木市での連携事業

2010度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業(「三木市文化遺産活用・活性化事業～三木市文化遺産再発見によるまちづくり～」)が開始され、今年度も三木市観光振興課の担当者および三木市観光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群(古文書・書籍)の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

具体的には、下張り文書剥がし作業班、古文書解読作業班、書籍整理作業班の3グループの活動を支援した。前者に対しては、以前より活動を指導してこられた尾立和則氏(保存修復専門家)からのアドバイスを受けた。後者に対しては、稲田真也が対応して下張り文書の解読作業および書籍整理を進めた。

今年度は、昨年度に引き続き三木市の歴史文化に関わる4回の古文書講座(第9回～第12回)をおこなった。連続講座では、崩し字を学びつつも、三木市域の歴史やその時代的背景の説明を重視する方針を進めたことが特徴でおおむね好評であった。今年度は、これまでの活動を報告書にまとめて刊行した。また、玉置家文書の書籍類を目録の上巻として刊行した。次年度に下巻を刊行する予定である。

また、今年度も昨年度に引き続き冬期古文書合宿(2月20日～21日)を三木市でおこない、旧玉置家住宅での歴史文化を活かしたまちづくり活動が学生教育の教材となった。

今年度は、新修三木市史作成に向け企画管理部

総務課との協議をおこない、市史編纂の指針作成を支援したことが挙げられる。(文責・板垣貴志)

篠山市での連携事業

今年度は、篠山市立中央図書館と連携して、篠山市立中央図書館に収蔵されている地域史料の整理サポーター養成講座(6月2日)を昨年度に引き続き行い、板垣が講師を務めた。2回のサポーター養成講座の参加者による整理サポーター活動を本年度は6回行い、2月9日より自主的な市民活動として本格的に始動することとなった。次年度以降も、定期的に図書館を訪問し自主的な活動を支援する予定となっている。



今年度の夏期古文書合宿(9月5日～7日)も篠山市で開催し、中西家文書の整理、撮影作業を行った。(文責・板垣貴志)

明石市との連携事業

(1)「明石藩関連資料調査・公開業務委託」(平成25年度)

① 資料調査

・黒田家文書(明石市受蔵分)

旧明石藩士・黒田家文書における黒田長保「日記」の翻刻作業を本業務の中で進めてきた。これ

までに、以下の史料についての解説を終えている(担当前田結城)。

1. 「出京心覚」(1-4)
2. 「日記」(慶応元年)(4-1)
以上は、24年度中に解説終了。
3. 「日記」(慶応3年)(4-2)
4. 「日記」(慶応4年)(4-3)
5. 「仮日記」(明治2年)(4-4)

なお、11月30日に発行された『LINK』第5号誌上に、前田の編著によって慶応元年日記前半部の史料紹介が掲載された。来年度発行の第6号には後半部が掲載される予定である。

・黒田家文書(神大購入分)

昨年10月に神大が購入した黒田家文書は、流出の経緯などは不明だが、前記明石市受贈分と元々同じ文書群であったことは明らかである。一点目録作成は一部を除いて未了。概要としては、黒田家の由緒書や過去帳が含まれていたのが注目されるが、そのほか黒田長棟やその子長保が作成した諸記録類とともに、比較的多数の書状が含まれていた。由緒書が含まれていたことで、後述の展示会における主要テーマの一つとして活用することができた。

・松平家旧蔵文書

24年度の速報展でも展示した松平家御年譜を活用した展示を行った。それ以外については特記事項なし。

② 調査研究成果

——「明石藩の世界Ⅰ」展への参画

本年9月21日(土)から10月20日(日)まで、明石市立文化博物館において、「明石藩の世界Ⅰ」と題する展示会が開催された。本展は昨年度に開催した速報展「明石藩の世界」をうけ、さらに内容を深める目的で、今年度より3ヶ年3回にわたって開催する計画の第1回目という位置づけにあった。

昨年度同様、明石市と明石文化博物館と人文学研究科地域連携センターが主催となったが、地域連携センターは主に展示の立案・構成を担当した。

今回の展示では、当初から黒田家所蔵の絵画の展示を行なうことが予定されていたが、そのコー

ナーについては、当センターにおける前担当者で現在神大文学部助手の橋本寛子氏(近世美術史)に、展示および図録原稿執筆を要請した。

本年度の展示会では、展示図録が製作され、その本文執筆も大部分を神大側が行なった。解説論文のタイトルは、以下の通りである(掲載順)。

木村修二「古文書が語る黒田家と明石藩主松平家」

前田結城「幕末の動乱と明石藩——軍事関係の史料にみる藩兵と農兵」

橋本寛子「明石藩黒田家に伝来する絵画について——渡辺崋山の日記から見る林半水を中心として」

その他、図録では図版解説、史料翻刻なども当センターが執筆担当している。

展示会期間中は、週1日程度、センター研究員(木村)が会場に待機し、展示解説希望者への解説などもおこなった。展示会観覧者(入館者)は期間中2171名(博物館調べ)であった。

9月29日には、記念講演会が開催され、橋本氏と木村が講演を担当した。参加者数73名。講演会終了後には、講演参加者の有志を対象に展示会場でのギャラリートークも実施し、木村、前田結城、橋本氏がそれぞれの担当コーナーにおいて解説をおこなった。(文責・木村修二)

(2) 地域文化財普及活用事業へのオブザーバー参加

明石市教育委員会文化財係では、2011年度から、黒田家資料等の調査・展示と並行しつつ、明石市内の身近な歴史遺産を調査して、その成果にもとづく「歴史マップ」を作成し、それによる地域活性化をめざす「地域文化財普及・活用事業」をおこなっている。小野市立好古館の前館長の大村敬通氏(明石市在住)を委員長とする実行委員会が立ち上がり、地域連携センターは、オブザーバー団体として協力をおこなってきた。3年間の事業を通じて「歴史マップ」が完成し、それを記念して、2014年3月15日に「明石市文化遺産普及活用事業成果発表会」が開催され、担当スタッフの坂江がこれに参加してコメントをおこなう予定である。

(文責・坂江渉)

高砂市への協力

センタースタッフの坂江渉が2011年5月1日付で「高砂市文化財審議委員会委員」に任命され、今年度も市の文化財行政および文化財指定等について審議した。(文責・坂江渉)

南あわじ市での連携事業

兵庫県教育委員会文化財室の紹介をうけ、2011年6月20日、南あわじ市社会教育委員長の木田薫氏と南あわじ市活性化委員会の関口功氏、発達科学部の伊藤真之教授がセンターを訪れ、南あわじ市の沼島・榎列・阿万地区での、歴史文化を活かしたまちづくり事業への協力要請があった。2011年度はそれにもとづき、2012年3月に至るまでさまざまな連携事業がすすんだ。しかし2012年度以降は、残念ながら、十分な連携関係を築くことができなかった。(文責・坂江渉)

淡路市との連携事業

2010～12年度の間、特別研究事業の一環として、センタースタッフの坂江渉と板垣貴志が、県内各地の教育委員会等を訪れ、それぞれの管内の民間所在歴史資料の把握状況の調査をおこなった。その一つとして2012年6月22日、淡路市教育委員会を訪れた時、市教委が所蔵する古文書等の歴史資料の保管のあり方や燻蒸に関する問い合わせがあった。その所蔵場所である淡路市立青少年センター(当時の所長は資料保管と移管に尽力された海部伸雄氏)を訪れ、資料状況を調査。その後、虫損の激しい資料群の燻蒸をセンターの協力で実施し、それ以来、緩やかな連携関係がつづいている。今年度は、2月2月開催の地域連携協議会にお

いて、淡路市内の歴史資料の展示・活用事業に関して海部伸雄氏が報告され、淡路市教育委員会に「後援」協力を賜った。(文責・坂江渉)

福崎町との連携事業

(1) 特別展への協力

福崎町立神崎郡歴史民俗資料館の平成25年度特別展「福崎のくらし～米づくりと人々～」(会期:10月19日～11月24日)への協力の一環として、米作りを中心とした農業および民具等の研究を行った。具体的には、豊作を祈願して奉納された「四季農耕図絵馬」について、姫路市内・神崎郡内で調査を行ったほか、河野未央が三木家史料から『農業日誌』の翻刻を行った。

(2) 三木家資料の整理と研究

三木家未整理史料について、前年度までに作成した仮目録をもとに、山崎善弘が分析を行った。また三木家研究の一環として、三木家文書のうち同家の経営にかんする資料の調査・撮影・分析を行った。これらの成果については、11月9日に開催された連続講座で、山崎善弘が「姫路藩大庄屋制の性格——大庄屋三木家文書を素材として」と題して講演を行った。

三木家と松岡家の交流について調査するために、7月12日～13日にかけて東京の三木家を訪問し、同家所蔵の松岡家関連書簡調査を行った。また、三木家の生活や柳田國男との交流について、三木美子氏に聞き取りを行った。松岡家からの書簡については、今後の活用のために全点撮影を行い、井上舞が翻刻を行った。

(3) 『播磨国風土記』の研究

2013年は風土記編纂命令1300年であり、福崎町においても、前年度より『播磨国風土記』の研究に力を注いできた。今年度の第34回山桃忌では、「地域に根ざした播磨国風土記の魅力」と題したシンポジウムが開催され、坂江渉がこれに参加した。また、1月18日～19日に、福崎町域を中心に

例年実施している、『播磨国風土記』関連地域の聞き取り調査・フィールドワークを行った。これには、坂江渉・井上舞のほか、学外から井上勝博・高橋明裕が参加した。

(4) 古文書講座の開講

前年度に引き続き、古文書講座を開講した。講師は河野未央が担当した。実施日は以下のとおりである。今年度については、特別展の内容と連動した資料をテキストに用い、くずし字を読むだけでなく、古文書を通して福崎の暮らしがわかるような形式をとった。講座は概ね好評であり、次年度以降も継続予定である。

第1回 8月28日

第2回 9月4日(悪天候のため中止)

第3回 9月11日

※場所はいずれも神崎郡歴史民俗資料館。

(5) その他

上記(1)～(4)の研究成果については、歴史民俗資料館平成25年度企画展「ふるさと再発見～地域を育む歴史遺産」(会期：平成26年3月1日～3月30日)において、成果を還元した。また、(2)・(3)の翻刻や聞き取り調査の成果については、『福崎町連携事業平成25年度活動報告書』に掲載した。加えて、福崎町の広報紙『広報ふくさき』上で、研究成果を随時還元した(平成25年4・5・6・8・9・11・12月号、平成26年1・2・3月号)。

(文責・井上舞)

猪名川町との連携事業

2013年度猪名川町生涯学習カレッジ「リバグレス猪名川」の開催協力

2013年度猪名川町生涯学習カレッジ「リバグレス猪名川」のAコース「歴史と文化」のコーディネートを、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが行った。「歴史と文化」としては3年目となる今年度は、近世・近現代をテーマとした。

地域連携センターがコーディネートしたテーマ

と講師は以下の通り。「地域歴史遺産論」「近現代社会の形成と猪名川」「近現代の猪名川からみる日本」(以上、神戸大学大学院人文学研究科教授・奥村弘)、「江戸時代の猪名川町域の村」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員・木村修二)、「近世地域社会の成立と展開」(奈良教育大学特任教授・山崎善弘)、「江戸時代の川西・猪名川の温泉めぐり」「お蔭参り・お蔭踊り」(以上、猪名川町観光ボランティアガイド・末松早苗)、「現代における地域社会の成り立ち」「水から考える摂津の近代」(以上、神戸大学大学院人文学研究科准教授・河島真)、「猪名川町の記録を守るー水濡れ史料の吸引感想ワークショップ」(人と防災未来センター専門員・吉原大志)、「幕末維新と猪名川」(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター研究員・前田結城)、「牛から読み解く日本近代社会」(神戸大学大学院人文学研究科特命講師・板垣貴志)。受講生は49人で毎回盛況であった。(文責・河島真)

佐用町との連携事業

佐用町(教育委員会文化財担当者・藤木透氏)との間では、2010年度から本格的な連携事業が始まった。今年度は、「佐用町文化遺産再発見活性化事業」(文化庁・文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業)にもとづき作成刊行した成果物(2013年3月刊行)、市民向けの啓発冊子『わたしたちの文化遺産——資料保存ガイド』の普及活動に取り組んだ。(文責・坂江渉)

香寺町での連携事業

(1) 香寺町史を読む会

この会は、町史執筆者が自身の執筆担当部分について報告するという形式をとっていたが、本年

度は執筆者の多忙と、一通りすべての執筆者が報告し終えたという事情により、形式を多少あらためて開催した。具体的には、大槻守と前田結城による交代制、かつ隔月開催というスケジュールを組み、章や節のなかの小項目の内容について、典拠となった史料や関連する先行研究などを用いて、より専門的に理解を深めるという形式をとった。毎回平均して約20名ほどの参加者があり、専門的な内容にもかかわらず、講座終了後の質疑応答はたいへん活発なものであった。

(2) 香寺歴史研究会第8回研究発表会

2014年2月19日(水)、香寺公民館多目的ホールにおいて、毎年恒例の研究発表会を開催した。主催は香寺歴史研究会、共催は神戸大学人文学研究科地域連携センターであった。

香寺では、一昨年・昨年と大字誌編纂をめぐってフォーラムが開かれ、町域内で大字誌編纂への関心が高まっていた。そうしたなか今年度の発表会は“地域の歴史遺産を次代へ伝える”が全体のテーマとされた。大字誌に向けて取り組む会員の実践報告とともに、地域の歴史を学ぶ小中学校の教育実践が発表され、次世代に歴史遺産を伝える研究会のこれからのあり方について、活発な議論がおこなわれた。なお発表会のプログラムは以下のとおりであった。

講演：大槻守(香寺町史研究室)「新出史料からみた近世八徳山の歴史」

研究発表：神崎茂樹(行重)「ムラの歴史を調べる」、藤尾昇(岩部)「『いくはべの里 岩部』を刊行して」

教育実践：香呂小学校「校外学習で学んだこと」、香寺中学校「町内巡検に参加して」

コメント：坂江渉(神戸大学地域連携センター)

(3) 『いくはべの里岩部』の刊行協力

岩部自治会より大字誌『いくはべの里岩部』が発行された。150頁を超す充実した内容であり、編集にあたっては『香寺町史』地域編および通史資料編が有効に活用されている。刊行までの経緯については第12回地域連携協議会で発表された。なお、刊行を記念して岩部史料展示会を3月末に

開く計画を進めている。以下にその目次を掲げる。

発刊に際して／はじめに／第1章岩部のはじまり(岩部のはじまり、岩部に残る遺跡群、的部里と岩部の地名の由来、小字)／第2章江戸時代の岩部(村明細帳からみた岩部村、市川の渡し、宿場町馬橋、屋号のある家、固寧倉)／第3章神様と仏様(大歳神社、岩部神社、吉岡大明神、清浄大明神、天満宮、不動明王藤尾氏明神、正八幡神社とのつながり、観音堂、地藏堂、むらの石造物)／第4章農業と水利(耕地と水利、大妻井堰、香寺土地改良区の地域整備、恒屋川放水路の完成、岩部地区計画、むかしの農業)／第5章公共施設と共有財産(岩部営農研修センター(公民館)建設までのみちのり、岩部消防団と望楼(火の見櫓)、中寺財産区、市川町外三ヶ市町共有財産、播但鉄道)／第6章民俗行事(花祭り、田祭り、虫送り、亥の子、七夕祭り、とんど、樽かき、屋台の歴史)／第7章学校と子供の遊び(むかしの小学校、香寺中学校の誕生、少年団、子供の遊び)／補綴(ここらへんの方言集、編集関係、あとがき、年表、編集委員)

(4) 町史史料の保存について要望

本年度も市史編集室を通じて保存場所の確保を要望し続けてきたが、これまで以上の方針は出せないという回答のままである。昨年12月には教育長に面談して、犬飼公民館を市による借り上げについて打診したがこれも了解には至らなかった。

(文責・前田結城、大槻守)